

「グスコブドリの伝記」論

一九二〇から一九三〇年代における宮沢賢治の農業思想を背景として

大島丈志

一、序論

本論文は、一九二〇～三〇年代の知識人と農業、そこから生まれる文学を考察するための一つのケースとして、岩手県の農業状況の中に宮沢賢治の農業思想および作品を置き、そこから作品の新たな読みを提示するものである。

近年、宮沢賢治の農民芸術論・農民運動を戦前の農本ナショナリズムの典型として捉え、負の遺産であるとする考察がなされている⁽¹⁾。確かに、近代科学を批判し、地方性を重視し、農民を芸術の主体とする「農民芸術概論綱要」に代表される思想は、近代性の否定と超克という農本主義的要素を含む。しかし、賢治の農業思想とは何だったのか、そして作品と農業思想とがどのような関係性を持っているのかについては未だ十分な考察がなされていない。単に農本主義で括るのではなく、一九二〇～三〇年代という時代の中で宮沢賢治が農業に何を見出していったのか、賢治作品に時代の何が批判されているのかが問われなければならないだろう。

具体的に本論は、まず当時の岩手県の農業状況と照らし合わせながら、大正一五年から昭和三年にかけて行われた羅須地人協会時代の賢治の農業思想を捉える。その上で従来の研究において、羅須地人協会時代の理想からの「後退」とであるとされてきた「ポラーノの広場」(昭和二年六月以降成立と推定)に表されている農業思想を再検討する。

以上の考察をもとにして、昭和七年三月、雑誌『児童文学』第二冊に発表された「グスコブドリの伝記」を考察する。この作品は「ポラーノの広場」の発展とされ、農村を舞台とした賢治作品の集大成とも言えるべき存在である。賢治の農業思想との関係性より、この作品の新たな読みを提示してゆきたい。

二、宮沢賢治の農業思想をめぐる問題

宮沢賢治は羅須地人協会時代に、農村恐慌によって困窮を極める農村に入り農事講演や稲の肥料設計を行うと同時に、宮沢家より借用した畑を開墾し蔬菜栽培を行った。この体験は場所・時がほぼ正確なたちで未発表の詩集「春と修羅 第三集」に表現されている。賢治が農業実践を行い、それを題材として創作したことは、彼の農村を描いた作品に独自のリアリティを与えている。その実践の背後にある賢治の農業思想を探ろう。

中村稔は大正中期から昭和初期に商業資本の急速な浸透によって東北地方の農村が疲弊していたこと、賢治作品に商業に対する嫌悪感が表われていることより、賢治の羅須地人協会時代の農業思想を次のように論じた。

宮沢賢治が考えた農村の発展は、農民が独自の芸術、宗教をもって独立した社会を形成することからはじまるのであり、都市の機能をもった農村が期待されていたのである。この場合、農村工業の占める地位は、いわゆる副業という程度をはるかに超えている。副業は当然に消費者を予想するけれども、

ここでは生産物は農民によってしか消費されないし、農民が必要とするものしか生産されない。まさしく自給自足経済の構想である⁽²⁾。

以上のように述べた上で中村は、賢治のこの構想が「花巻周辺の農村経済を、日本あるいは世界の経済から遮断しようとした」⁽³⁾と述べる。そして、羅須地人協会の後に作られた「ポラーノの広場」において産業組合による「商品の販売」が肯定されていることに触れる。それは次のような場面である。

それからちょうど七年たったのです。ファゼーロたちの組合ははじめはなかなかうまく行かなかったのですが、それでもどうにか面白く続けることができたのです。私はそれからも何べんも遊びに行ったり相談のあるたびに友だちにきいたりしてそれから三年の後にはたうたうファゼーロたちは立派な一つの産業組合をつくり、ハムと皮類と酢酸とオートミルはモーリオ〔の〕市やセンドートの市はもちろん広くどこへも出るやうになりました⁽⁴⁾。

中村は、この描写に「あきらかに羅須地人協会からの後退がある」⁽⁵⁾とした。

多田幸正は中村の考察を受けて一九世紀末に商業主義・機械制度に代表される近代文明批判を行ったウィリアム・モリスとの影響関係から賢治の農業思想を考察した。多田は、モリスと同様に賢治にも商業主義・機械制度に対する嫌悪があったと述べ、羅須地人協会時代の賢治の農業思想を次のように論じた。

彼（賢治 - 論者）はむしろ「商業的農業」をこそ否定すべきもの、いや、超えるべきものとみなしていたのであり、そうした考えの当然の帰結として、自給自足経済を試みようとしたのではなかったか⁽⁶⁾。

さらに、多田は「ポラーノの広場」に触れ、「物々交換から商品経済への、自給自足経済から産業組合方式への転換である」とし、それは羅須地人協会時代の理想からの「明らかな後退」⁽⁷⁾であったと述べた。

中村・多田の論考はともに、賢治の農業思想は商業に対する嫌悪感から始まっており、羅須地人協会時代の農業思想の根幹には農民自身による自給自足経済の構想があると主張する。そして、この構想が「ポラーノの広場」に描かれる産業組合による商品の販売の構想へと変化していくことを指摘し、それを自給自足経済の理想からの後退と論じている。

果たして賢治の農業思想は物々交換から商品経済へという直線的な変化で捉えられるのだろうか。そして「ポラーノの広場」は理想からの後退なのだろうか。

大正一五年一月、岩手国民高等学校における講義の中で、賢治は今後の岩手県農業について「^{ママ}総べからく半農半商で行くより外あるまい、ノ半農半工で行き組合、物々交換で行くより仕方がない」⁽⁸⁾と講義している。また、大正一五年四月一日の『岩手日報』朝刊の「新しい農村の建設に努力する 花巻農学校を辞した宮沢先生」と題された記事の中で、「自分かひたいにあせした努力でつくりあげた農作ぶつの物々交換をおこない」⁽⁹⁾たいと述べている。以上から、賢治の農業思想には自給自足経済の

構想があったとする中村・多田論は首肯することができる。

しかし一方で、講義における「半農半商」や「半農半工で行き組合、物々交換で行くより仕方がない」という表現からは、賢治の農業思想は中村・多田の述べるような商業嫌悪から自給自足経済へ向かい、羅須地人協会時代以後に商品経済へと傾いたという直線的なものではなく、羅須地人協会時代に既に自給自足経済と商品経済とを複合したものであったことが推測される。賢治の農業思想をこの両者の複合として再考察しなければならないのではないか。

三、岩手県農村における商品経済の浸透と蔬菜栽培

岩手県は、現在米所として知られている。しかし、明治末期から大正中期までの岩手県は総面積の七割を林野が占め、傾斜地が多く、畑の面積が田の面積を常に上回っていた⁽¹⁰⁾。大正中期までは養蚕業が盛んであり、養蚕のための桑畑が必要とされていたのであった。

以上のような岩手県の農業状況は、第一次世界大戦後の恐慌による繭価の暴落とそれに連動した畑の減少によって大正五年頃より変わっていった。特に大正一二年以降、畑地面積が急激に減少するのに反比例して田の面積が増加していった。また品種改良によって寒さに強い稲が作られ、米の収穫高は上がっていった⁽¹¹⁾。

このような状況の中で賢治は、自ら開墾した畑で、蔬菜栽培を行い、そして収穫物を町で販売した⁽¹²⁾。賢治が農民による農民のための自給自足経済を構想したのであれば、なぜ彼は稲・稗・粟・甘藷といった自給自足経済の基盤となる作物を作らなかったのであろうか。

賢治は既に大正一四年六月二五日の友人、保阪嘉内宛ての書簡において「いろいろな辛酸の中から青い蔬菜の毬やドロの木の間を閃きや何かを予期します」⁽¹³⁾と述べており、商品作物としての蔬菜の販売は、農業実践当初からの企画であったといえる。この点からも賢治の農業思想は自給自足経済の試みのみではなかったといえることができる。

岩手県の農業が畑から田へと変化する中で賢治の畑地における蔬菜栽培は、一見時代に逆行するかに見える。なぜ賢治は商品作物を作り販売したのであろうか。そこには、大正中期以降の岩手県農業をめぐるもう一つの変化が影響していると考察される。

岩手県の農業のもう一つの変化は鉄道によってもたらされた。岩手県では明治二三年に東北本線、大正三年に岩手軽便鉄道が開通し、都市の工場・海外からの肥料の購入が盛んになると同時に、東京などの大都市への農作物の出荷が可能となった。これによって大正中期以降岩手県の農村には急速に商品経済が浸透していった。この中で、蔬菜の栽培にも大きな変化があった。『岩手県統計書』を見ると大正一三年以降、牛蒡・人参の収穫高がほとんど変化していないのに対して、甘藍（キャベツ）や漬け菜（白菜の一種）の収穫高が急増していることがわかる。特に甘藍は大正一三年から昭和八年の一〇年間に約三・五倍もの収穫増となっている。甘藍の収穫高が急増した原因は東京や大阪といった都市部において岩手の甘藍の需要が急速に高まったためであった⁽¹⁴⁾。ではなぜ甘藍なのか。その原因は岩手の気候にあった。甘藍は稲のような熱帯を原産とする寒さに弱い作物と比べて、欧米の冷涼な土地で発達した比較的寒さに強い蔬菜であった。よって、甘藍は夏季においても冷害に悩まされる岩手県にとっては気候条件に適した作物であった⁽¹⁵⁾。また甘藍は稲に比べ多肥料の作物であり、鉄道の開通による肥料の近代化がなされたことによって大量生産が可能となったのであった⁽¹⁶⁾。

押野武志は『宮沢賢治の美学』の中で盛岡高等農林の後輩で賢治の教えを受けた松田甚次郎が農本

ナショナリズムへと傾斜していったことを指摘し、賢治の農業思想を負の遺産として捉える。しかし昭和二年三月、賢治の教えを受けて山形で農村実践を行った松田甚次郎は、まず田を借りて稲作をはじめ、肥料の自給自足を試み、これを基盤として副業や共同施設の設立による地域の活性化を図っている。自給自足の為に稲作を行い、そこから農村共同体へと働きかけていった松田の農業実践と、賢治のそれは対称的であり、両者を一括りにすることはできない。

賢治存命中の岩手県では、大正中期以降、田が増加し畑が減少していった。その一方で、鉄道交通の発達による肥料の近代化、商品作物の都市部への販売という変化がおこっていた。賢治が羅須他人協会時代に行った蔬菜栽培は、大正中期以降の岩手県における蔬菜の栽培・販売の流れの中に位置し急速な商品経済に対応したものであったと考えられる。

四、宮沢賢治の農業思想

吉田司は「共同討議 宮沢賢治をめぐる」において、賢治が米を作らず周囲から浮いた蔬菜や花卉を栽培していたことを指摘し、農村の遊び人「浮遊児」が目立つために皆の休む盆に仕事をするのと同様な「『浮遊児』的パフォーマンスだったと思う⁽¹⁷⁾」と述べた。しかし、前述したように、羅須他人協会時代の前年に出された保阪嘉内あての書簡に蔬菜栽培の企画が書かれていること、当時の農村で甘藍を代表とする蔬菜栽培が盛んになっていたこと、昭和三年の詩「三原 第二部」にも大島でちさ（レタス）を播く様子が描かれることから、賢治の蔬菜栽培が単なるパフォーマンスであったとは考えにくい。以下、前述した大正中期以降の岩手県の農業状況の中で賢治が何をやろうとしていたのかを探り、そこにある賢治の農業思想を明らかにしてみたい。

羅須地人協会時代を描いた「春と修羅 第三集」には、賢治の行った蔬菜栽培が具体的に描出されている。そこからは賢治が大正一五年から昭和二年にかけて甘藍・玉葱・玉蜀黍・雪菜（小松菜の一種）・トマト・白菜・燕麦を栽培したこと、幾つかの作物が同時期に栽培されていたことがわかる⁽¹⁸⁾。このような多種多様な蔬菜栽培を行った賢治の農業思想とはどのようなものであったのだろうか。次の二つの点から見てゆこう。

第一に都市と農村との関係から見てみよう。甘藍がそうであったように蔬菜栽培は水稻とくらべて多量の肥料の投下が必要であった。このことから、賢治の行った多種多様な蔬菜の栽培は、岩手県における肥料の近代化を念頭に置いたものであるということが出来る。賢治は同じ時期に、無料で稲の肥料設計を行っている。ここでも賢治は冷害に強い反面多くの金肥（購入肥料）を必要とする陸羽一三二号を推奨していた⁽¹⁹⁾。このことから、賢治の農業思想には金肥を多量に投下して生産量を上げるという、肥料の近代化の思想が存在していたということが出来る。前述した中村・多田論では、羅須地人協会時代の賢治の農業思想は商業の拒否・嫌悪を基盤とした農民による農民のための自給自足経済の構想であったとする。しかし、賢治は羅須地人協会において商業を排除していたのではなく、むしろ金肥を多量に必要とする冷害に強い稲や、甘藍のような商品として都市部で需要のある作物を推奨・栽培していたのである。

都市と農村との関係から見るならば、羅須地人協会時代の賢治の農業思想は農村を閉鎖するのではなく、都市部からの肥料の購入・都市部への蔬菜の販売を志向する。そこからは商品経済の中で農村を生かしてゆこうとする、時代の流れをリアルに捉えた農業思想を明確に読みとることができる。

第二に、蔬菜栽培の内容である。賢治の蔬菜栽培は単なる商品作物の生産ではなく、将来性のある

蔬菜の模索であった。当時、農会にも稗貫地方の特産品として甘藍を作ろうとする動きがあり、賢治の蔬菜栽培もこのような流れの中にあった⁽²⁰⁾。しかし賢治は甘藍だけではなく、トマトのような当時はまだ珍しい商品作物に興味を示していた⁽²¹⁾。トマトは単に珍しいだけではなく、甘藍と同様に冷涼地の原産であり、岩手県の風土に適する可能性のある作物だった⁽²²⁾。岩手県におけるトマトの作付け面積は大正一五年から昭和三年までの三年間に約二倍になっており、トマトは、今後発展する可能性のある商品作物であったのである⁽²³⁾。このことから、賢治は、甘藍のような既に需要のある蔬菜栽培を行うと同時に、将来の岩手県農業を視野に入れたトマトを栽培していたといえることができる。

以上より、賢治の羅須地人協会時代における農業思想は中村・多田の述べる「自給自足経済」のみではなく「商品経済」の構想も強く持っていたこと、その実践は吉田の述べる「浮遊児」的パフォーマンスではないことがわかる。賢治の農業思想は岩手県農村における肥料の近代化と都市部への販売という商品経済の急速な浸透に対する対策として位置づけることができる。その中で賢治は寒冷な岩手県でいかに作物を作るかという問題の解決のために、冷害に強い稲を推奨した。その一方、飢饉をよぶ可能性のある稲作のみの単一農業ではなく、本来の岩手県の気候に適した畑作のあり方も構想し多様な作物を栽培していた。賢治の羅須地人協会時代の農業実践は、岩手県の風土に合い、かつ商品として将来性のある商品作物を模索した、実験農場の試みであったのである。

「ポラーノの広場」に商品の生産・販売による産業組合の成功という農村の未来像が描かれたことは、単に羅須地人協会時代の「理想からの後退」と言うことはできない。むしろそれは、大正中期以降の田の増加に伴う稲作の単一化の危険性に対する批判を含んでおり、岩手県が冷害というリスクをいかに回避し、急速な商品経済の浸透の中で生き残るかという模索から生まれた一つの構想であったと言える。ただし、その構想は「ポラーノの広場」における産業組合の成功が、どのように成されたのかが不明であるように、現実よりも未来を見据えた実験的な構想であったと言えよう。

五、「グスコブドリの伝記」を読み直す

- 赤鬚の主人に着目して -

以上の考察を踏まえた上で、イーハトーブにおける「冷害の克服」を一つの大きなテーマとする「グスコブドリの伝記」を読み直してゆく。

従来の「グスコブドリの伝記」論では、主人公グスコブドリの自己犠牲的死の是非をめぐる議論が積み重ねられてきた⁽²⁴⁾。しかし、一方でグスコブドリによって救われる農民や、農民とグスコブドリの死との関係性についてはほとんど考察されてこなかった。

「グスコブドリの伝記」におけるグスコブドリと農民との関係性について論じた数少ない論のうち、西岡敦子は下書稿「グスコブドリの伝記」(昭和六年頃成立と推定される)との比較より、主人公グスコブドリと農民との関係は、選ばれた特権的な科学者と貧しい農民という二項対立的な関係であるとする。そして両者の間には「負い目」「裂け目」が存在しており、グスコブドリの死は「自らの命でもって『負い目』『裂け目』を償おうとした」⁽²⁵⁾ものであったと論じている。

だが果してグスコブドリと農民を特権的な科学者と貧しい農民という二項対立のみで捉えてよいのだろうか。

古澤由子は賢治の農業実践を素材にした口語詩稿「[みんな食事すんだらしく]」の下書稿(一)や「火祭」に詠われている「まっくらな巨きなもの」という表現を引用し、ここには当時の疲弊した

農村の中で活路を見出そうとする人間の持っていた「闇」の心性が表されており、それは農民にも賢治にも存在していたとする。下書稿「グスコブドリの伝記」では、肥料を入れすぎてオリザを倒してしまった農民がそれを主人公のせいにして殴るも、その後自らの「誤解」を認め「涙を流して」謝りに来ることで両者が和解する描写がある。それに対して、「グスコブドリの伝記」では、農民側の「誤解」は農業技師のせいとなり、農民は謝りに来ない。古澤はこの点に触れ、賢治も含め当時の農村に関わる人々の求めた活路の多くが「まっくらな巨きなもの」「闇」に結び付いてしまうことを知った賢治のショックが農民の「誤解」を「巧妙にごまかし」てしまい、その結果として「ブドリ像も百姓像も変化しないわけにはいかなかった」⁽²⁶⁾とする。「グスコブドリの伝記」において農民側の「誤解」が和解の形をとらずに隠蔽されてしまうことを考えるならば、グスコブドリの死を「負い目」「裂け目」のみで解釈することは不十分であり、「誤解」の背後に「まっくらな巨きなもの」を見る古澤論には頷ける。

しかし、古澤論は農民を一つのものとして括ってしまっている為に依然としてグスコブドリと農民という枠組みに囚われてしまっているのではないだろうか。

「グスコブドリの伝記」には、科学者グスコブドリの晩年まで彼と交流し、赤い甘藍や耳の長い兎を作る山師の赤鬚の主人という農民が登場する。この赤鬚の主人は、西岡論の科学者と農民という二項対立から逸脱する農民である。またグスコブドリを殴ることも無く古澤論の「誤解」を持つ農民とも直接関わらない。「グスコブドリの伝記」においてグスコブドリと農民との関係を考える場合には、この他の農民から逸脱する赤鬚の主人という農民について考えていかなければならないだろう。本論では、農民、特に赤鬚の主人に注目して「グスコブドリの伝記」の読みをすすめてゆく。

赤鬚の主人は作品中盤においては肥料を大量に投下し増産を狙うなど山師ではあるものの、オリザ（稲に酷似した主食となる穀物）を作る野原の農民の一人として描かれている。そして、度重なる自然災害によってオリザ栽培が上手くいかず、零落してゆく。しかし、作品終結部では彼がオリザではなく珍しい商品作物を作って幸せに暮らす様子が描かれている。作品の終結部の該当場面を挙げよう。

それからの五年は、ブドリにはほんたうに楽しいものでした。赤〔鬚〕の主人の家にも何べんもお礼に行きました。

もうよほど年は老つてゐましたが、やはり非常に元気で、こんどは毛の長い兎を千〔疋〕以上飼つたり、赤い甘藍ばかり畑に作つたり、相変わらずの山師はやつてゐましたが、暮しはずうつといふやうでした⁽²⁷⁾。

前述した「グスコブドリの伝記」の下書稿「グスコブドリの伝記」には、この赤鬚の主人が商品作物を作って幸せに暮らす様子は書かれておらず、雑誌発表形である「グスコブドリの伝記」において加筆されたものであった。下書稿から発表形への改稿にあたっては、本文の分量が三分の二に減らされている。にもかかわらず、作品終結部において以上の加筆がなされている。このことは作品終結部における赤鬚の主人の存在が「グスコブドリの伝記」の読みを考える上で重要であることを示している。

作品終結部で赤鬚の主人が「毛の長い兎」や「赤い甘藍」を作って幸せに暮らしている描写は、オリザを作る他の野原の農民との間にどのような違いを生むのであろうか。そしてグスコブドリの死

とどのような関係を持つのであろうか。

土佐亨は「『グスコブドリの伝記』私見」において、「グスコブドリの伝記」に登場する赤鬚の主人に注目し、作品全体における意味を問う。土佐は、山師である赤鬚の主人が肯定的に描かれていることを指摘し、さらに利己的に山師張る赤鬚の主人の生き方の発展形として利他に生きるグスコブドリが描かれたと考察する。土佐は、以下のように述べる。

赤鬚の男もブドリも、己れの夢と祈願に生き、現実には敗残や滅亡の道をたどるとはいえ、自我内面の燃焼を徹底した行動に転じていく人間だったのであり、そこにこそ作品の主題も求められるのではなかろうか⁽²⁸⁾。

立場は異なるものの、グスコブドリ、赤鬚の主人は共に、数々の自然災害にも負けずに活動しており、この点では両者の生き方に共通項を見出す土佐の論は頷ける。ただし土佐論では赤鬚の主人が敗残の道をたどると指摘しているが、作品内に置いて敗残の危険性が高いのは赤鬚以外の冷害に弱いオリザを作る野原の農民である。赤鬚の主人は、彼らとは違い、自発的に冷害に弱いオリザから耳の長い兎や赤い甘藍といった付加価値の高い商品作物の生産へと移行してゆくことのできる農民として描かれるのである。

赤鬚の主人の作る赤い甘藍は、昭和初期には未だ定着していない珍しい蔬菜であり、都市向けに付加価値を高めた商品であると同時に、オリザに比べて冷害の被害を直接受けにくい作物であった。また、兎であるが、当時、大量の現金収入を得られる副業として、ウサギを飼育することが流行し、雑誌等で盛んに宣伝されていた。ただし兎の飼育は岩手県ではまだ実験的であった。「春と修羅 第三集」「[何をやっても間に合はない]」の推敲過程において兎を飼育する人物は「その親愛な近代文明と／新な文化の過渡期のひとよ」⁽²⁹⁾と表現されその試みへの共感が詠われている。つまり赤鬚の主人は冷害によるオリザの全滅、それによる飢饉というリスクを回避する可能性を持ち、都市向けの商品作物でしっかりと生計を立てることのできる野原の農民の先駆者として描かれているのである。

以上から「グスコブドリの伝記」には、冷害に弱いオリザ（稲）という単一の作物を作る農民から、作物に多様性を持ち冷害にも強い野原の農民へという農民の変化の物語が描かれているといえることができる。

続橋達雄は「グスコブドリの伝記」を賢治の農村活動の報告書ではないとした上で、「結果として深く社会の問題とかわかっていくことになる。そのような性格をいやおうなしに帯びるに至った作品である⁽³⁰⁾」と述べている。続橋が述べるように「グスコブドリの伝記」には時代の状況が反映されている。赤鬚の主人に代表される農民の変化には、岩手県における稲作の単一農業化に対する批判が含まれていよう。そして、ここからは、羅須地人協会時代に賢治が構想・実践した、岩手県に適した商品作物によって、将来の農村を見据えるという農業思想との関係性を窺うことができる。岩手県の農業状況と宮沢賢治の蔬菜栽培との考察において確認したように、賢治の羅須地人協会時代の蔬菜栽培は、自給自足経済の構想と共に、岩手県の風土に合い、商品として価値のある作物を作るという構想を持っており、今後の岩手県を見据えた実験農場の試みであった。賢治は、昭和三年以降、体調不良に悩まされ、再び長期的な蔬菜栽培を行うことができなかった。しかし実験農場の構想は晩年まで持ち続けられていたと考えられる。そのことは、農村を舞台とした作品「ポラーノの広場」において、

産業組合の試みが成功し都市に商品が販売される様子が描かれている点、産業組合による商品生産の夢を描いた詩「産業組合青年会」が昭和八年九月に雑誌『北方詩人』に投稿されたことからも知ることができる。

賢治の農業思想は科学者を誤解し、科学者によって救われる弱い農民のみを描いたのではない。むしろ冷害に積極的に対応し科学者とも対等に付き合うことのできる赤鬚の主人という先駆者の出現を描いたのである。

では、赤鬚の主人が先駆者として描かれることによって、グスコブドリの死の意味はどう変わったのだろうか。

赤鬚の主人の商品作物生産の様子が描かれない下書稿「グスコブドリの伝記」では、赤鬚の主人を含めて野原の農民はみな冷害に弱いオリザを栽培している。主人公の死は、現時点の冷害から一時的にでも、貧しく弱い農民を守るための特権的な科学者による死として描かれる。

一方、発表形「グスコブドリの伝記」では、赤鬚の主人に代表される農民の先駆者によって、今後野原の農民が自ら冷害を回避する可能性が示される。冷害の被害を受けにくい商品作物を作る赤鬚の主人という農民が描かれることによってグスコブドリの技術と死は相対化され、彼の死は冷害に苦しむ全ての農民を救うための特権的な死ではなくなる。さらに作品終結部においては、今後のイーハトーブの農業を担う可能性を持つ農民の先駆者赤鬚の主人と科学者グスコブドリとの対等な交流が描かれている。赤鬚の主人の出現は、科学者と農民がそれぞれの活動をし、冷害による飢饉の繰り返しではない農村の可能性を描き出している。

ただし、イーハトーブの未来がそれほど明るいわけではない。赤鬚の主人は山師という、野原の農民全体からすれば周縁の人物なのである。赤鬚の主人のこの立場は、グスコブドリの死の特権性を減少させると同時に、彼に現時点で行うべき事柄を認識させるものであっただろう。グスコブドリは赤鬚の主人に代表される未来の農村への希望を持ちつつ、眼前に迫る冷害を克服し大多数の野原の農民を救うために死地へ赴くのである。

グスコブドリの死が将来のイーハトーブの可能性に繋がっていることは、死地に赴こうとするグスコブドリとクーボー大博士とが交わした次の表現に最もよく表されている。この部分もまた、下書稿「グスコブドリの伝記」には無く「グスコブドリの伝記」において加筆されている。

私のやうなものは、これから沢山できます。私よりもつとつと何でもできる人が、私よりもつと立派にもつと美しく、仕事をしたり笑ったりして行くのですから⁽³¹⁾。

「私のやうなもの」が直接示すのは火山技師である。しかし、「沢山」の中には赤鬚の主人のような農民が沢山できること、つまり農民自身が貧しく弱い状況を変えていくことに対する期待が含まれていることは間違いないのである。

六、結論

宮沢賢治の農業思想には、自給自足経済の理想から商品経済への「後退」があるとされてきた。しかし羅須地人協会時代の当初から急速な商品経済の浸透に対応する構想があり、彼の蔬菜栽培はそのための実験農場であった。「商品の販売」が肯定される「ポラーノの広場」は理想からの「後退」では

なくこの構想が作品として全面に押し出されたものと言える。

そして「ポラーノの広場」に繋がる「グスコブドリの伝記」において、赤鬚の主人は付加価値の高い商品作物で生計を立て冷害を回避する可能性を持つ農民の先駆者として、農民の変化への期待を象徴していたのであった。作品終結部に赤鬚の主人が幸せに暮らす描写が加わることで、グスコブドリの死は下書稿にあった一時的に弱い農民を救済するための死ではなく、自らの期待が将来に繋がることを信じた者の後世のための死へと変化したのである。

注（１） 押野武志『宮沢賢治の美学』翰林書房 二〇〇〇年五月 二四五頁

（２） 中村稔『宮沢賢治』筑摩書房 一九九六年五月 初版第六刷（一九七二年四月初版第一刷 二七頁

（３） 注（２）同書同頁

（４） 宮沢賢治『新校本宮沢賢治全集 第十一巻 童話 本文篇』筑摩書房 一九九六年一月 一一二頁

（５） 注（２）同書 五一頁

（６） 多田幸正「宮沢賢治における自給自足経済の試み」（『日本文学』日本文学協会 一九八二年十一月）三〇頁

（７） 注（６）同書 三五頁（直前引用も同じ）

（８） 宮沢賢治『新校本宮沢賢治全集 第十六巻（上）補遺・資料 補遺・資料篇』筑摩書房 一九九九年四月 一九六頁

（９） 『岩手日報』岩手日報社 大正一五年四月一日 朝刊三面

（１０） 林野面積 岩手県『岩手県史 第九巻』名著出版 復刻版 一九七二年一二月 六九四頁／傾斜地 加藤治郎『東北稲作史』宝文堂 一九八三年六月 三八頁

（１１） 田畑面積・米の収穫高 岩手県『岩手県統計書 第三編 勸業』岩手県（一九一〇年三月～一九三五年三月まで）

（１２） 「春と修羅 第三集」には、賢治が大正一五年から昭和二年にかけて栽培したトマトや、甘藍（キャベツ）、玉蜀黍の様子が克明に描かれている。堀尾青史『年譜 宮沢賢治伝』には、賢治ができた蔬菜・花卉をリヤカーにつみ「町へ売りにゆく」「売れる場合もあれば進呈する場合もある」（中央公論社 一九九一年二月 三〇六頁）という記述がある。

（１３） 大正一四年六月二五日 保阪嘉内宛て書簡（宮沢賢治『新校本宮沢賢治全集 第十五巻 書簡 本文篇』筑摩書房 一九九五年一二月 二二八頁）

（１４） 川原仁左工門編『宮沢賢治とその周辺』刊行会出版 一九七二年五月 二八〇頁

（１５） 熊沢三郎『改著 総合 蔬菜園芸各論』養賢堂 一九六五年七月四一七～四一八頁

（１６） 伊藤東一『肥料の買ひ方使ひ方』広文社 第三版 一九三七年一二月（一九三六年一二月第一版）四〇～四八頁

（１７） 吉田司他「共同討議 宮沢賢治をめぐって」（『批評空間』第一期第一四号 太田出版 一九九七年七月）九頁

（１８） 例えば詩「井戸」「青い煙りで唐黍を焼き」「盗まれた白菜の根へ」からは、大正一五年六月から一〇月にかけて白菜・甘藍・玉蜀黍・トマトが同時に栽培されていたことが伺える。

- (19) 注(14)同書 二七八頁
 - (20) 注(14)同書同頁
 - (21) 当時トマトがいかに珍しい作物であったかは大正一五年、岩手県における甘藍の作付け面積が約三四二反、玉蜀黍が約三三〇反であったのに対して、トマトのそれはわずか七反であったことから推測されよう。(注(11)『岩手県統計書 第三編 勸業』参照)
 - (22) 注(15)同書 一〇九頁
 - (23) 注(11)『岩手県統計書 第三編 勸業』参照。
 - (24) グスコープドリの死に関する代表的な論稿としては、鳥越信の「科学の限界を限界としてきちんと描くことを怠り、ひたすら必然性をもたない自己犠牲へと突っ走ったこの作品は、完全な失敗作」であるとする考察(「グスコープドリの伝記」『国文学 解釈と鑑賞』至文堂 一九七三年一二月 七九頁)や、工藤哲夫の、「グスコープドリが死んだのは、ただ『自分でできることをし』たに過ぎない」(「二つの英雄像 デクノボーとブドリと」『女子大文』第一〇〇号 京都女子大学国文学会 一九八六年一二月 一一一頁)が挙げられる。両論稿とも、グスコープドリと救われる野原の農民との関係性については殆ど触れられていない。
 - (25) 西岡敦子「『グスコープドリの伝記』 主題をめぐる諸問題」(『宮沢賢治研究 Annual』第二号 宮沢賢治学会イーハトーブセンター 一九九二年三月) 一七五頁
 - (26) 古澤由子「宮沢賢治と『環境』考」(『社会文学』第六号 日本社会文学会 一九九二年七月) 五六頁
 - (27) 宮沢賢治『新校本宮沢賢治全集 第十二巻 童話Ⅴ・劇・その他本文篇』筑摩書房 一九九五年一月 二二七頁
 - (28) 土佐亨「『グスコープドリの伝記』私見」(萬田務他編『作品論 宮沢賢治』双文社 一九八四年七月) 二三二頁
 - (29) 宮沢賢治『新校本宮沢賢治全集 第四巻 詩 校異篇』筑摩書房 一九九五年一〇月 三四七頁
 - (30) 続橋達雄「宮沢賢治『グスコープドリの伝記』考」(『野州国文学』三七号 国学院大学栃木短期大学国文学会 一九八六年三月) 三九頁
 - (31) 注(27)同書 二二九頁
- (おおしま・たけし/千葉大学大学院)